

やがてやってってくる給食との別れ

給食委員会の新しい試みとして、給食に携わっている方々のコメントを委員が取材し、学びポケットを通してそれを紹介しています。これまでの給食委員会にはなかった画期的な試みだと感心する一方で、さまざまな立場の方が給食に携わり、小中学生のためにがんばってくださいているのだと改めて感じる事ができます。

三年の皆さんにとっては、給食が食べられるのがあと九日となりました。小学校に入学してから九年間、ずっと味わっていた給食ともいよいよお別れですね。そのことに感傷的になることは、現在ないかもしれませんが。恐らく、四月からの新しい生活が始まり、それに慣れてきたころに給食が少しずつ懐かしくなってくることでしよう。そして、親になって我が子が小学校に通うようになるころに、給食の話題が出たり、献立表を目にしたりますと、自分が小中学生の時に食べていた給食が思い出されるかもしれません。焼きそば、ささみのレモン風味、揚げパン、レンコンチップス、カレーライス……給食の昔話にきつと花が咲きますよ。そして、成長した皆さんの心には、「もう一度食べたいなあ」という感情が、きつと生まれることでしょう。

給食を再び口にできるチャンスがあります。それは教師になることです。教師になると、またしばらくの間、給食を味わうことができます。おまけに、市をまたいで勤めれば、その市独自の給食を楽しむことだってできますからね。

私はこれまでに、多治見市（正確に言うと、当時土岐郡笠原町）の給食と中津川市の給食を経験しました。やはり市が違えば、それぞれに特徴があり、新しい感動や発見がありました。

特に、長く勤めた中津川市では、ソフト麺ではなく、本物のパスタが献立に登場していたことが印象的でした。中華丼（食器がどんぶりでした）も人気の高い献立でした。教師として初めて勤めた中津川市の中学校には、「ランチルーム」という食堂があり、全校生徒三百人以上が一堂に会して食事していたのも良き思い出です。

もちろん瑞浪市の給食にも、他市にはない特徴があります。最近では地産地消を大切にし、地元の野菜や肉を積極的に使って提供してくださいさっていますね。ラーメンも、いろいろな味付けがあり、食べる側としては本当に楽しみです。訳ありだったのでしょうか、過去に川上屋のケーキが出たこともあり、びっくりしたことを今でも覚えています。（うらやましいでしょ？）

私も瑞浪市で小中学時代九年間を過ごしました。さらには、三十七年間の教師生活のうち、二十四年間瑞浪市の給食のお世話になりました。その給食とも、あと一か月でお別れです。非常に寂しく思っています。三年生だけでなく、一、二年生にも、いずれは給食とのお別れが来ますから、今の給食をじっくり味わうとともに、感謝の気もちを忘れないようにしてくださいね。（二月二十二日 記）